



2018年度 えんだより 5

社会福祉法人 恵泉福社会
光の子保育園
園長 長島 博樹

主 題 感じる

月のねがい

- ☆ 神さまが創られた自然の中で過ごすことを喜ぶ。
- ☆ 砂・泥・水で遊び、心地よさを感じる。
- ☆ 自分でやろうとすることが増え、楽しさを感じるとともに、うまくいかなくても大丈夫と感じる。

おことば

悪から遠ざかり善を行い、平和を願ってこれを追い求めなさい。

(ペテロへの手紙 I 3章11節)

行 事 予 定

5 月

- 02日(水) ランチデー
- 12日(土) モンテ実験・4・5月生誕生日会
4歳児ザリガニ釣り参観
- 14日(土) 尿検査一次
- 18日(金) 内踝検診 9:00~

6 月

- 07日(木) 歯科検診 9:30~ 尿検査二次
- 09日(土) 子どもフェスティバル
- 15日(金) 森の日
- 19日(火) キャンプ説明会 17:30~18:30
- 22日(金) 七井戸公園へ・ランチデー
- 30日(土) 6・7月生誕生日会・大掃除・結成式

<朝晩の送迎について>

スクールゾーンや畑よりの進入路を市営住宅側から逆走したり、市営住宅近隣また住宅を過剰なスピードで通り抜けたたり、壁際のポールの破損等を指摘されております。近隣の方々のみでなく、皆様の安全を守る為のルールに御協力をいただけますよう。また、保護者以外の方の送迎時にも、御協力くださいますようお願いください。危険運転等を見かけた場合、車のナンバー等を職員までお知らせ頂けると幸いです。よろしくお願ひ申し上げます。

基本的自尊感情

先日、「第一部会 小学生陸上競技大会」が岩名運動公園で行われました。卒園生が出場するという連絡を頂き、当時担任をしていた先生が応援に顔を出し、走りハードル・400m リレー・1000m 走・800m 走・個人100m 走などなど、各小学校の代表として選ばれた卒園生達の顔が、とても力強く輝いてたとの報告を受けました。

光の子紫さんの時代、マラソン大会で2番になり悔しい思いをした男の子は、今年、学校対抗リレーのアンカーを務め優勝を果たし、個人でも100m 2位の成績を残していました。その他の子ども達も全力を出し切って活躍する動画の中の姿に逞しい成長を感じました。

特に800m 走・1000m 走に出場した女の子と男の子の姿に感動します。何週もグラウンドを走る競技です。高学年になると「疲れる」「暑い」「しんどい」という声が聞こえそうな種目ではないでしょうか。そこに全力を出し切り、上を目指している卒園生を誇りに思い、目頭が熱くなりました。

今年度初めての保育参観が、先週土曜日に行われました。保育参観ではありませんが、4歳児は保護者と共にザリガニ釣りに行きました。本来フェスティバルのある年は、年長児の宇宙実験(モンテ)参観はやっていましたが、4歳児の参観は行っていません。しかし、これが実現した背景には、あるお父様の3年越しのチャレンジへの願いがあったのです。

卒園したお兄ちゃんの参観で、ザリガニに触れなかったお父さんは、妹さんが4歳になった時の参観こそ「ザリガニを触る!!」という目標を持っていらしたのです。そして、そのお父様の呼びかけで黄色4歳児全家庭がザリガニ釣りの体験をすることができました。

大人になって苦手な事に挑戦する勇気を持つことは、逃げようと思えば逃げられる大人にとって、とても貴重で尊い経験だと感じ感動します。しかし、これこそ「生きる力」を親が子どもに示し、子どもがああ1000m・800mを走り切る向上心を育む原動力になるのです。そして「暑い」「面倒くさい」「だるい」「疲れる」と言う弱音の人生ではない、充実した生きる喜びを実感できる人生が生まれるのだと、卒園生の姿や、光の子を選んでくださった保護者の皆様をみて実感いたしました。

以前ご紹介しましたが、**乳幼児期から育む自尊感情— 生きる力、乗り越える力 —**という本を近藤卓さんが書かれています。この方は健康教育学、臨床心理学を専門に、思春期の青年の「わけのわからない心の葛藤や不安」に向き合いカウンセリングされてきました。この過程で現代の子どもたちがかかえる「苦しみ」「やる気が出ない」「自信がない」「生きていていいのか」という思いに直面し、自尊感情に対する誤った解釈の下で乱用され生まれた問題を多くの教育者と研修を重ねて整理された本です。

自尊感情は1890年、心理学者のウィリアム・ジェームス「心理学原理」第一巻の中に言及しています。誰にでも共通したものではなく、その人のその時の要求と成功の度合いによって高まるという考え方で他者から成功しているように見えても当の本人が求めているものと合致していなければその人にとって意味を持たないという事になります。この考え方は「成功」という結果に依存しており、社会の中で価値があるか、優れているかという事で決まって来る感情、いわば向上心の基になるのはこういう感情です。これも大切な感情だと思います。しかし、これが全てではないと思います。と、近藤先生は述べています。

一時、リレーをやっても皆一番で順位をつけない時代がありましたが、近藤先生はこのような自尊感情を社会的自尊感情とし、褒めて、認めて、育まれる自尊感情は人間が必要とする自尊感情の内の一部に過ぎず、失敗したり、叱られたりするとすぐにその感情はし

ぼんで状態に左右されやすい不安定なものと言います。人は他者にずっと勝ち続けることはできません。その根っこにはもっと大事な部分があると考え、その根が弱まっていると育つはずの部分が育っていないというところで青年たちの心の奥底にある不安や孤独の葛藤を抱えていると。

この根こそ基本的自尊感情と言われるものです。この基本的自尊感情は身近で信頼する人と生活に根差した体験(ご飯を一緒に食べる。お風呂に一緒に入るなど)を共有し、失敗、喜び、悩み、楽しみ、怒り、不安、安心という様々な感情を共有することで「自分はこれでいいのだ」と薄紙を重ねていくように形成されます。そうやって形成された感情は他者との比較で成り立つ相対的なものではなく、絶対的で無条件に自分を受け入れる感情となり、容易なことでは揺るぎません。この基本的自尊感情が乏しい青少年が増えていると実感していると言います。この事は、逆を返せば幼児期の家族との共有体験の時間が少なくなっているとも言えるのでしょう。

私も保育現場に入って子ども達が素直に「自分の感情を出せない」「成功失敗を気にしすぎる」「大人の顔色を見る」という姿が見える子が増えていることに問題を感じ、「自分らしくある」「合っている、間違っているに関係なく自分の思いを伝えようとする」「恥ずかしいより嬉しい、楽しいを素直に感じられる」「失敗してもやってみよう」と挑戦する」という、子ども自身が壁を崩して、本来それぞれの持つ力を遺憾なく発揮できる姿を目指して先生方と考えてきましたが、この本から共有体験の大切さを改めて実感し、今保護者の方と保育参観ではできるだけ参加していただけるような機会に協力していただいています。

「本来基本的自尊感情を育む共有体験は、普段の生活の中に普通に存在しているはずですが、今の子どもたちをめぐる環境においては、その機会は確実に少なくなっています。父親が帰って来る時間が遅い。母親も家事や仕事に忙しい。子どもも塾や習い事で忙しいというすれ違いの現代生活の中では一緒にいるという事すら難しくなっています。」

「幼い時に保護者と一緒に道端に咲くタンポポを見て『かわいいね』と微笑み合う」、一緒に食事をするなど「感情は他者がいるからこそ生まれる、つまり感情を司る心はその人の中にあるのではなく、人と人との間にあるとも言えるのです」

「それでも人が育つために「一緒にいる」ことができる時間と場所を与えてこられるのが家族です。一緒に時間を過ごすという物理的なチャンスがもっともあるからです。ゆえに意図的に共有体験に繋がる関わり方をしようという姿勢が求められます。」(鯨岡峻)

このため乳幼児期の日常の中、また自然や命に触れる家族の共有体験は、人の心を支える揺るぎない基本的自尊感情を強める重要な鍵となるのです。年長児がモンテッソーリ文化の中で今、地球誕生から生命の歴史の学びが進められていますが、ご家庭でお母様、お父様が一緒に考えて調べたり本を読んでもらっている様子を伺い、親子の共有体験を重ねて子ども達の学ぶ好奇心や意欲を高めてくださっている関係に、光の子の子ども達の未来に確信を持ちます。

今子どもたちは、2年に一度の子どもフェスティバルに向かって活動が始まりました。世界の恵まれない子ども達に思いをはせ、様々な生活環境の下で生きる子ども達に「薬を買ってあげたい」「きれいな水を飲めるようにしてあげたい」「お勉強の為の鉛筆やノートを届けたい」など子ども達なりに自分達の幸せを分けてあげたいと、お金を集めて役立てようとしています。子どもたちの心が様々な共有体験を通して育まれますように願いを込めてフェスティバルの準備を進めていきたいと考えています。子ども達を応援していただけます様、よろしく願いいたします。



取ったど～～
撮って～



—花育の時間—
この葉はどうか？



柏餅作り 柏の葉は園庭から
取りました。純国産！



ひかりのこ 泥んこの季節です！